

山形県中部の俳額に関する一考察

本郷民男*・権海珠**

This study is to analyze and collect the data on Haigakus of the middle region in Yamagata Prefecture. 97 pieces of Haigakus have existed in the middle region of Yamagata Prefecture. The oldest Haigaku was written in 1741, and the recent ones also exist. There are 33 pieces of Haigakus in Oemachi, and 25 pieces of them were written in Maekugaku. Haigakus from Zion Temple in Sagae City in 1828 were written by the established Haizins of various regions in Japan those days. Haigakus were made of the wood board commonly; however, Haigakus in Sagae City were made of paper. There are Haigakus which Gpho's disciples dedicated their mentors at the Japanese shrine of Yachimangu in Oemachi. Haigakus were dedicated as Horaku to please gods in the old days, and in the later days they could be dedicated for various purposes.

Haigakus were dedicated to teachers such as Uedachyosyu of Kyoto, Mitumorimikio of Tokyo and Matusimazikko of Hamamatu in Meiji era. Especially the existence of 4 pieces of Haigakus dedicated to Matusimazikko as mentors have not drawn attention until now.

Key words : Haigaku, Haiku, Yamagata Prefecture, Matusimazikko
(俳額、俳句、山形県、松島十湖)

1. 序論

本研究の目的は東北地方の山形県中部に存在する俳額¹⁾の資料を収集し、その資料から山形県中部の俳額の特徴を抽出することにある。

* 韓国俳句研究院研究委員、日文化学

** 慶尚大学校日語教育科教授・同教育研究院責任研究員、日文化学

1) 俳句を板などを書いて額とし、寺社へ奉納したものである。奉納の目的は神仏を楽しませる法楽や故人の追善が多かった。

山形県は山地が多いが、最上川^{もがみがわ}の流域を中心に人が住み俳句が盛んな所であった。先行研究として東北地方の青森県や秋田県や山形県北部などについては、本郷民男・権海珠(2013a・b、2014)がある。山形県中部の研究としては山形県立博物館(1985)が作成した絵馬の目録、渡辺信三^{わたなべしんぞう}(1977)の研究、寒河江市教育委員会^{さかえし}(1993)の調査、河北郷土史研究会^{かほく}(2009)の絵馬調査、大江町教育委員会^{おおえまち}(1991～1994)の俳額調査などがある。しかし、絵馬の調査のごく一部であったり、小さな町に限定された調査であったりして、もう少し広い範囲にわたって俳額の資料を集計して特徴を分析するには至っていない。

東北全体の俳句の歴史を研究した井上隆明^{いのうえたかあき}(2003)の論著は断片的に俳額について言及している。井上隆明(2003:158)は「山形は元禄末から宝永にかけて調和^{ちょうわ}2)、不角^{ふかく}3)系統の前句付がさかんであった」とし、さらに「名古屋地方^{なごや}4)とならび、地方雑俳の一中心とされる特異性が光る」と指摘した。前句付は出題された句(前句)に付句をすることである。前句付から様々に分化したものを雑俳と呼んだのである。

研究方法は山形県中部の俳額の資料を収集して、それを分析して市町村単位で時代別に集計し、それを奉納の主な趣旨や目的で分類することにする。山形県は俳句が盛んで俳額も多かったので、この論文では山形県の中中部だけを取り扱うこととする。

本稿では江戸時代の俳諧であっても俳句と呼ぶことにする⁵⁾。前句の額は前句額と呼び、雑俳のなかでも謎の額であれば、謎額と呼ぶことにする。地名や人名などの難解な語には、最初に出た時に振り仮名を付ける。

2) 1670年頃には江戸で最大の勢力を持つ俳句の宗匠であった。しかし芭蕉の蕉門に押されて、晩年は前句の宗匠となり、1715年に没した。

3) 芭蕉の後の江戸の俳壇は、其角などの洒落風と不角などの化鳥風に二分された。理知的な洒落風に対して化鳥風は卑俗で通俗的であった。1753年に93歳で没した。

4) 名古屋狂俳や尾張狂俳と呼ばれる。資料集や論著が少なくない。

5) 俳句という用語は明治20年代に正岡子規が普及させた言葉で、江戸時代には発句や俳諧と呼ばれていた。

2. 本論

2.1 河北町の俳額

河北郷土史研究会(2009)の調査で、18枚の俳額がある。江戸時代の俳額は1枚だけで、他の俳額は明治時代以後のである。下記の〈表1〉となる。

〈表 1〉河北町の俳額一覧表

区分 所在地	奉納年	名称	大きさ(cm)	備考
<small>みぞのべなんせんじ</small> 溝延南泉寺	明治32年(1899)	俳額	72×278	6)
溝延八幡神社	昭和48年(1973)	俳額	67×156	7)
溝延八幡神社	昭和57年(1982)	俳額	58×184	8)
溝延八幡神社	平成7年(1995)	俳額	89×242	9)
<small>はたなかいなり</small> 畑中稲荷神社	紀元2558年 ¹⁰⁾ (1898)	俳額	46×142	
<small>しもまきはくさん</small> 下槇白山神社	明治35年(1902)	俳額	54×116	11)
横町秋葉神社	大正元年(1912)	俳額	56×340	12)
<small>うちだてふとみいなり</small> 内楯福富稲荷社	昭和7年(1932)	俳額	51×153	13)
<small>やはらちまんぐう</small> 谷地八幡宮	明治11年(1878)	俳額	107×360	14)

- 6) 蓮の絵が描かれ、選者は蓮舟・藤村・無能の3人、蓮舟が額の字も書いた。
- 7) ひまわり会の奉納で、桜や若葉の句が多い。4月29日の奉納(昭和天皇誕生日)で、それに因む句が2句ある。「大君の誕生の桂節花日和」
- 8) 「奉納改修記念詠草」の表題があり、建物の改修記念として奉納された。
- 9) 「奉納ひまわり四百号記念詠草」の表題があり、この趣旨で奉納された。
- 10) 明治になると国粋主義の高まりで、紀元前660年に即位したとされる神武天皇の即位年を基準とする神武紀元^{じんむきげん}が出現した。
- 11) 選者は十湖である。
- 12) 松庵源翁が序を書き軸として末尾に句を載せ、この人物を中心に奉納された。
- 13) 羽南が漢詩と序と絵を書いている。この稲荷は江戸時代から郷倉(年貢米を保管する倉庫)の守護神として建てられた小さな祠である。後に租税米の倉庫の守護神と変わり、そこに奉納した。
- 14) せきあんていごほう石蘭亭五鳳が稲穂の絵と願文を書いている。この俳額には漢文の長い序文がある。師匠の五鳳は書画詩文俳諧にすぐれて数百人の弟子がいるので、師の徳を表して奉納すると書かれている。

やちしやくういん 谷地宿用院	明治34年(1901)	俳句和歌額	50×180	15)
どけいこじぞうどう 土慶小路地藏堂	記年なし ¹⁶⁾	俳額	57×158	17)
あらまちなかふどうそん 荒町中不動尊	明治43年(1910)	俳額	70×180	18)
あらまみなみこうたい 荒町南皇大神社	紀元2538年(1878) ¹⁹⁾	俳額	90×320	
荒町南皇大神社	記年なし(1878年)	俳額	60×220	20)
こうりんじ 高林寺	慶応4年(1868)	俳額	49×120	21)
たかきまの 高関熊野神社	丁卯(1867) ²²⁾	俳額	47×121	23)
高関熊野神社	明治16年(1883)	俳額	94×272	
高関熊野神社	明治37年(1904)	俳額	76×172	

畑中稲荷神社の俳額は神武紀元で年代が表記され、「曇りなき空やこゝろや四方拜」や、「君が世を唄ふて帰るさくら狩」といった句が含まれている。四方拜は元日の明け方に天皇が行う行事で江戸時代にも少しは俳句に詠まれたが、たいていは軍国主義の時代に詠まれた。ただ、俳額の中にそうした句は少数で、他は普通の俳句である。下記の高関熊野神社の明治37年(1904)の俳額は日露戦争の戦勝祈願の俳額である。

-
- 15) 新たに鑄造した梵鐘かねくようの鐘供養で、和歌17首、俳句28句である。鐘供養は、春の季語である。「つき初る鐘の音ひびく春の空 沙門 魯聞」「山門のかすみもはれてかね供養」
- 16) 奉納した年が書かれていない。俳人の顔ぶれから、明治時代の後半あるいは大正時代の何れかである。
- 17) 羽南が絵を描き、選者は月の本時雨など6人。大坂・豊前(福岡県)・甲斐(山梨県)・伊予(愛媛県)・遠江(静岡県)など、遠方の俳人がいる。
- 18) 評者は無能と十湖である。「大神の足あとふみて田植哉 十湖」
- 19) この俳額には、明治11年という記年もある。
- 20) 全37句の内の12句が、谷地八幡宮の1878年の俳額の句と一致する。
- 21) 西国三十三か所を団体で巡礼した記念と考えられる。現在の奈良県の長谷寺はせでら、大阪府の藤井寺ふじいでら、和歌山県的那智なちなどを巡拝した句が詠まれている。
- 22) 丁卯は慶応3年で、この俳額は江戸時代である。
- 23) 卯月(4月)の奉納で、新年と春の句が書かれている。

ひとすじ 一筋の心いさまし大矢数	おおやかず	きこく 喜谷
せんしやう 戦捷もかうあれかすと破魔矢哉	はまや かな	きゆうこう 久光
かちどり 勝鶏や勝声あさく羽繕ひ	はづくろ	いつわ 一和
あつぱれ こうみやう 天晴な功名みせよくらへ馬		じう 時雨
名月や敵も味方も同じ秋	評者	ちやうしやう 聴秋
人はみな軍人なり国の春		じっこ 十湖
芸ありて輪卒まもれぬ月陣		さざなみ 小波

「一筋の」の句は、京都の三十三間堂で行われた通し矢を詠んだ句である。大矢数は夏の季語で、^{やかずはいかい}矢数俳諧²⁴)という言葉もある。「戦捷も」の句は、初詣の時に神社で買う破魔矢を詠んだ。子供が災難に遭わないようにという縁起物を戦捷と結びつけた。「勝鶏や」の句は、春の季語である^{とりあわせ}鶏合²⁵を題材とした。戦いに勝った闘鶏がゆうゆうと羽の手入れをしている。そのようでありたいという祈願である。「天晴な」の句は、5月5日に京都の^{かみかも}上賀茂神社²⁶で行われる競べ馬を題材とし、戦場で名を残すような働きをせよという鼓舞の句である。評者は京都の上田^{いわや さざなみ}聴秋²⁵)、浜松の松島²⁶)、東京の²⁷)と、遠方の大物俳人に委嘱した。何れも正岡子規等と対立する勢力であった。このように戦勝を露骨に表現するのではなく、伝統的な題材による抑制された

24) 一昼夜で何句の俳句を詠めるかを競い、西鶴が23,500句を詠んだのが最高記録である。

25) 1852～1932。大垣藩の上席家老の家に生まれたが、京都に出て俳人となった。花の本11世として、旧派を代表する俳人であった。

26) 1849～1926。俳人であるとともに、報徳思想(二宮尊徳が説いた思想)の実践家で、豪農そして郡長などの政治家でもあった。俳人としては、弟子が1万人とさえ言われた。

27) 1870～1933。小説家・児童文学者として知られた。俳人としては、尾崎紅葉とともに新派俳人を代表する存在であった。旧派の宗匠の権威を否定して、新しい時代の俳句を指向した。

俳句を詠んだ。地元の俳人でなく、遠方の俳人が評者である。

高林寺の俳額は、西国三十三か所の霊場を団体で巡礼した記念である。江戸も最後になると、東北から遠い西国まで俳人の団体で巡礼したのである。五来重(1976)は「このあいだ岩手の遠野盆地をあるいて、部落毎にかならず十数基の西国巡礼塔と金毘羅塔が立っているのを見て、江戸時代の東北農民の巡礼への執念を空恐ろしくさえおもった」と論じていたのである。

2.2 寒河江市の俳額

寒河江市教育委員会(1993)の調査で28枚あるので、〈表2〉として纏めた。備考に記したように28枚の内で12枚が紙の額である。

〈表 2〉寒河江市の俳額一覧表

区分 所在地	奉納年	名称	大きさ(cm)	備考
慈恩寺本堂	享和3年(1803)	前句額	75×182	板 ²⁸⁾
慈恩寺本堂	文政11年(1828)	俳額	60×177	板
慈恩寺本堂	明治16年(1883)	俳額	85×191	板 ²⁹⁾
慈恩寺桜沢坊	天保11年(1840)	前句額	42×144	板 ³⁰⁾
慈恩寺華厳院	万延2年(1861)	俳額	92×187	板 ³¹⁾
地藏堂華厳院	元治元年(1864)	前句額	36×187	板 ³²⁾
寒河江八幡宮	寛保元年(1741)	俳額	51×127	板 ³³⁾

28) 東根の風寿選で、本堂の弥勒仏へ奉納された。

29) 明倫社(三森)幹雄と石蘭亭五鳳の選である。三森幹雄(1829~1910)は芭蕉を神格化した旧派の大御所である。石蘭亭五鳳は河北町の俳人で、河北町のいくつかの俳額に名を残した。

30) 風化して読めない。

31) 文一山人の仙桃図が大きく描かれ、俳句は6句だけである。

32) 周玉・一夕・如松の評である。

33) 10句だけの連句を法楽として奉納した。

寒河江八幡宮	天保13年(1842)	俳額	63×173	紙 ³⁴⁾
寒河江八幡宮	天保15年(1844)	俳額	177×188	紙 ³⁵⁾
寒河江八幡宮	明治28年(1895)	俳額	80×190	紙 ³⁶⁾
寒河江八幡宮	昭和34年(1959)	俳額	54×127	板 ³⁷⁾
寒河江八幡宮	昭和63年(1988)	俳額	48×168	紙 ³⁸⁾
<small>うしまちしゅくりゆういん</small> 丑町宿竜院	明治28年(1895)	俳額	49×187	紙
<small>なのかまちゆうりんじ</small> 七日町裕林寺	昭和37年(1962)	俳額	38×92	板 ³⁹⁾
<small>こしいざかこくぞうどう</small> 越井坂虚空蔵堂	寛政元年(1789)	俳額	58×184	板 ⁴⁰⁾
<small>かしまがっさんりょうしよくう</small> 鹿嶋月山両所宮	安政2年(1855)	俳額	45×131	板
<small>ほんだてまんぶくじ</small> 本楯満福寺	明治39年(1906)	俳額	65×290	紙
本楯満福寺	明治44年(1911)	俳額	48×179	紙
<small>ほんだてびしゃもんどう</small> 本楯毘沙門堂	弘化4年(1847)	俳額	87×183	紙
本楯毘沙門堂	安政6年(1859)	俳額	64×179	紙
<small>たかやくまの</small> 高屋熊野神社	明治38年(1905)	俳額1	45×136	紙 ⁴¹⁾
高屋熊野神社	明治38年(1905)	俳額2	45×178	板 ⁴²⁾
高屋熊野神社	明治40年(1907)	俳額	89×95	紙
<small>さらぬまはくさん</small> 皿沼白山神社	明治8年(1875)	前句額	45×150	板 ⁴³⁾

34) 宣命体の長い序が書かれた法楽であるが、破れて読めない箇所が多い。

35) 天保の三宗匠の鳳朗と梅室から寄せられた句もある。選者は今の山形県西川町で名主をしていたくどうとうしゅう工藤稲州である。稲州は鳳朗の弟子で、当時のこの地方の俳句を指導した宗匠である。「横身してやっと思ぬけし牡丹かな 鳳朗」、「寝あまりし夜のおもはくを鴨の啼 稲州」

36) 日清戦争の勝利を祝う戦捷記念俳額である。

37) 昭和の奉納であるが、句の内容は神に因んだ法楽句が多い。

38) 「大江公入 荘入部八百年 芭蕉翁奥の細道紀行三百年 さくらんば俳句会創立二十年 各記念」という表題がある。

39) 最後に「茶崖俳句会夕裕林吟行」と奉納の趣旨を明記してある。

40) 「境内の眺望四季混雑」として、眺望を詠んだ戯れの句が奉納された。

41) 最初に「戦捷記念」と大書した日露戦争の戦捷記念である。

42) 「奉納 梅の香に 闇も霞も なかりけり 献額主 五風庵久山」と6行にわたる大きな字で表題を書き、その後に花鳥風月の俳句が書かれている。

43) 前句の他に謎も少しある。主明の選

皿沼白山神社	明治37年(1904)	俳額	41×180	板
皿沼白山神社	明治42年(1909)	俳額	42×185	板 ⁴⁴⁾
柴橋伊豆神社	文政11年(1828)	前句額	47×180	紙 ⁴⁵⁾
^{やくわかしま} 八鍬鹿嶋神社	明治18年(1885)	俳額	52×176	板

慈恩寺本堂の文政11年(1828)の俳額が注目される。この俳額は、慈恩寺僧であった宥勝^{ゆうしょう}が奉納した。この時の宥勝は、現在の埼玉県^{こしがやし}越谷市の光明院で修業していた。宥勝は淋山として俳人でもあり、江戸を初めとして知友が多かったので、遠方の高名な俳人を網羅した俳額となっている。この俳額には44句ある。42人から句をもらい、自分の句を2句加えた。この俳額を研究した阿部西喜夫^{あべゆきお}(1985)は、「俳句が4グループに分けて書かれている。第1類は9人で、京都、大阪、名古屋と遠方の俳人である。第2類は10人で江戸の俳人である。第3類5人は、陸奥^{むつ}⁴⁶⁾の俳人である。第4類19人は地元である出羽^{でわ}の俳人である」ことを指摘した。こうして、遠方の俳人を先に書くという遠方の俳人に配慮した配列になっている。この俳額は京都や江戸で活躍していた当代を代表する俳人の句を載せる。陸奥や出羽といった比較的近い俳人でも名のある俳人の句を集めた。なお、宥勝の師である巢兆が、第2類の最後となっていて、宥勝の人柄をしのばせる配列である。

山里によい鐘の鳴る涅槃^{ねはん}かな 蒼蚪^{そうきゅう}(京 天保の三宗匠⁴⁷⁾)
 ゆふ立やはらはら起きる草の鹿 月居^{げつきよ}(京 三大家⁴⁸⁾)

44) 遠江の十湖宗匠選とある。河北町の高関熊野神社の評者、松島十湖である。

45) 松和評

46) 現在の青森県・岩手県・宮城県・福島県にあたる。

47) 蒼蚪・梅室・鳳朗を天保の三宗匠と呼んだ。

48) 月居・土郎・道彦を三大家と呼んだ。

ちる華や日も夕暮れのあみた笠	ちんどう いせ 椿堂(伊勢)
秋風の静かにしたる月夜哉	たくち おかざき 卓池(岡崎 天保の四老人49)
沢山な月日は出来て海の華	しろう 士朗(名古屋 三大家)
過去問む華の下水汲む小家	ひこ みち彦(江戸 三大家)
抗うてハ又ひろかるや春の水	せいび 成美(江戸 江戸四大家50)
朝雨や彼岸に入りし桃の枝	こやま 孤山(江戸)
山寺や蜂にさされて更衣	そうちよう 巢兆(江戸 江戸四大家51)
初春や弥勒菩薩ハなぜおそい52)	なんざん 南山(仙台 瑞鳳寺十四世)
注連繩のうちはひやつく桜哉	むなん 夢南(出羽53)
秋風や寝よとのかねはいくつつく	おつに しろいし おうう 乙二(白石 奥羽四天王54)
玄鳥よそこは貴人の這入口	ごめい 五明(秋田 奥羽四天王)
月に雁物おもはする夜なりけり	ちようせい さかた 長翠(酒田 奥羽四天王)
蓮の葉とともに枯たる蜚かな55)	しんざん 淋山(宥勝の俳号)
さんね きょうがく こま 三会の暁にハ驚覚を蒙らんと56)	

-
- 49) 前記の天保の三宗匠に卓池を加えて四老人と呼んだ。
- 50) 成美・道彦・完来・巢兆を江戸の四大家と呼んだ。
- 51) 建部巢兆(1761~1814) 白雄門下で、画家としても知られる。俳額を奉納した宥勝の師である。
- 52) 後記するように、弥勒菩薩は兜率天での長い修業の後に、人間界へ下生する。弥勒如来となって三回の説法を行って多くの人を救済する。南山は仙台藩の藩主の帰依を受けた当時としては東北を代表する学僧であった。正月になってまた一つ年を食ったが弥勒如来が出現されるのが遅すぎて、説法を聞く前に死んでしまうと詠んだ。
- 53) 現在の山形県の出身で、僧侶であった。後に江戸へ出て俳句に専念し、俳号も一具と変えて江戸で屈指の俳人となった。
- 54) 乙二・長翠・素郷・五明を奥羽四天王と呼んだ。
- 55) 晩秋になると蓮の葉が枯れる。秋の蜚もそれに合わせるように枯れてしまうという句である。俳人の淋山として詠んだ句であるが、蓮の葉を仏法とし、仏法が枯れてしまうので仏法で生きて来た蜚である自分も枯れてしまうという意味も込められている。
- 56) 次の俳句の前書で、これ自身は俳句ではない。弥勒下生経で弥勒が下生すると三

誓ひけり弥勒の御代のはつ鳥^{みよがらす}57) 宥勝

この時期には俳人番付⁵⁸⁾が発行されたり、俳人を序列化した。俳額に書いてあるわけではないが、そうした序列を括弧内に付記した。

63人もの遠方の俳人の句を集めた栃木県足利市の大岩毘沙門天^{あしかがし おおいわびしゃもんてん}の俳額には及ばないが、東北にこれほどの俳額があるのは貴重である。ただ、没年を見ると五明(1803)・士郎(1812)・長翠(1813)・成美(1816)・道彦(1819)・乙二(1823)・月居(1824)等、故人となった俳人が多い。

2.3 大江町の俳額

大江町教育委員会(1991~1994)で調査した小冊子に収録された30枚の俳額に、それから漏れた3枚を加えて、下記の〈表3〉を作成した。33枚の内では25枚が前句額あるいは謎額である。特に江戸時代では18枚の内に普通の俳額は1枚しかない。

〈表 3〉大江町の俳額一覧表

区分 所在地	奉納年	名称	大きさ(c m)	備考
道海四所大明神 ^{どうとしいしよないみょうじん}	天保12年(1841)	前句額	48×162	松和評 ^{しょうわひょう} 59)

回の説法を行うと説く。初会の説法で96億人、二会で94億人、三会で92億人が阿羅漢になる。つまり、仏になるということである。これを三会の説法と呼ぶが、56億7千万年後とされる未来の話である。そこで仏教徒は死んでもミイラとなり、弥勒如来が出現した時に目を覚まして説法を聞くことを願った。驚愕とは、そのことを言う。

57) はつ鳥は、正月に初めて見たり聞いたりするカラスである。弥勒如来が出現されたら初会の説法を聞くことを誓うというのである。宥勝は真言宗の僧である。宗祖の空海は高野山でミイラとなって弥勒の出現を待つことになっている。それに倣うと誓ったのである。

58) 相撲にならって「俳諧名家相撲組」といったものが発行された。

^{やぶかつゆき}矢羽勝幸(1994)『信濃の一茶』中央公論社、pp.197-205.

59) 「評」とは選者のことである。

道海四所大明神	天保12年(1841)	前句額	45×163	可能評
道海四所大明神	文久元年(1861)	前句額	30×139	
道海地藏尊	文久元年(1861)	前句額	30×139	かぎょうぼいしゅう 花暁梅周
なかざわぐちやま 中沢口山神社	文化7年(1810)	前句額	47×94	もえい 茂栄評
中沢口山神社	慶応元年(1865)	前句額	79×181	しゅうこくしゅうぎよく 周谷周玉
たしろすわ 田代諏訪神社	元治2年(1865)	前句額	47×152	周玉評
じゅうろうぼたくまのさん 十郎畑熊野山	慶応元年(1865)	前句額	41×163	周玉評
十郎畑熊野山	慶応2年(1866)	前句額	42×163	花暁評
よいつくしま 用巖島神社	享和3年(1803)	前句額	18×110	
用巖島神社	明治元年(1868)	前句額	45×182	いっせき 一夕周玉
ふしくまごしんじ 伏熊護真寺	天保13(1842)	前句謎額	54×147	一夕評
伏熊護真寺	弘化5年(1848)	謎額	36×147	松月評
とみさわおさわでら 富沢大沢寺	嘉永4年(1851)	俳額	60×182	
左沢実相院	慶応元年(1865)	前句謎額	42×158	周玉選
ふじたわかみやほちまん 藤田若宮八幡神社	明治11年(1878)	前句額	55×187	周玉
西原稻荷神社	明治15年(1882)	前句額	47×188	周玉一夕
左沢実相院	明治24年(1891)	俳額	42×158	追善 ⁶⁰⁾
漆川巨海院	明治25年(1892)	俳額	31×116	追善
くろもりはちまんぐう 黒森八幡宮	慶応元年(1865)	前句額	74×190	周玉周谷
こみくまつくせんぜんほうじ 小見熊窟山善法寺	慶応4年(1868)	前句額	45×182	周玉周谷
さわぐちみたけ 沢口御嶽神社	明治9年(1876)	俳額	41×157	きざん 基山評
ぬくみくまの 貫見熊野神社	明治26年(1893)	前句謎額	57×187	一夕評
さわぐちさいりんじ 沢口西林寺	昭和36年(1961)	俳額	41×78	
あてらざわじつそういん 左沢実相院	昭和38年(1963)	俳額	90×168	追善
漆川巨海院	昭和38年(1963)	俳額	60×138	
沢口御嶽神社	文化6年(1809)	前句額	48×163	かしゅう 可松評
こじゅう 小新稻荷神社	天保3年(1873)	前句額	46×186	
小清光院	明治13年(1880)	前句謎額	36×180	周玉一暁

60) 最初に八人の俳句を書いてから、「右追善会各詠」と記す。末尾に「師父朋友の為に追福の法会を実相精舎に営み…」と奉納の趣旨を記してある。

左沢八幡神社	昭和10年(1935)	俳額	63×181	復興額 ⁶¹⁾
<small>うるしかわきよかいいん</small> 漆川巨海院	平成6年(1994)	俳額	49×187	62)
貫見大里権現社	明治19年(1886)	前句謎額	57×187	
藤田若宮八幡神社	明治15年(1882)	前句額	47×188	

上記の伏熊護真寺の前句謎額から、いくつかの謎を解釈した。謎は題に対して、「解く」にあたる文と、その「心」にあたる文が書いてある。「おそろしい事」(題)と掛けて何と解く。「羽織」と解きます。その心は、「(どちらも)紐(火も)つけます」という具合である。

〈表 4〉 謎

区分 題	解く	心	備考
いっぱい	<small>しんか</small> 虱の相談	のみな	63)
いつの間にやら	きれた <small>きゃはん</small> 脚絆	すねでた	64)
桜もさいた	筆のさや	よしのさいく	65)
桜もさいた	ぬるくした <small>さんすけ</small> ぞ三助	うめすぎて	66)
目をとじて	万年も亀は	いきたいか	67)

記のように謎を書いた額があるということは、前記した井上隆明の「地方雑俳の中心」という指摘の通りである。大江町になぜ前句(謎)額

61) 天明2年(1782)に俳額を奉納した時の草稿を発見し、額がないので復興し、新たに昭和の人の俳句も加えた。

62) お経を読む会が奉納した。序に「ことし、平成6年(1994)は芭蕉生誕350年、没後300年にあたる。…巨海院東堂 高山法彦」とある。

63) 「一杯」は「飲みな」であり、「虱の相談」も「のみ蚤もな」である。

64) いつの間にか、(息子などが)すねて出て行つたと、切れた脚絆から足の脛が出たのを結びつけた。

65) 桜が咲けば、名所の吉野にさあいくぞであり、筆の鞘なら、吉野で細工した桜の皮の製品が良い。

66) 桜も咲いたのは梅も過ぎてからである。銭湯の三助に熱いぞと水でうめさせたから、ぬるくしたぞと苦情を言うわけである。

67) 目を閉じては死ぬという意味もあるから、生きたいかの問いになる。万年も生きると信じられている亀も、生きたいかである。

や謎額が多いという点について、飯田竜太(1981)の次の主張が注目される。「このことは同時にまた、俳句の地方性、土着性とも関わってくると思う。結論を急ぐなら、私はその出自からして、本来俳諧というものは地方の文芸と考えている。」と論じている。大江町という一地方の風土から、このような俳額が生まれたと考えられる。

大江町はカラムシの一種の青苧あおその一大産地であった。前記<表3>の黒森八幡宮の前句額に「のこしてのこして」という課題に付けた「絹糸や青苧もともにうりきらす」⁶⁸⁾という句がある。さらに小見熊窟山善法寺の俳額には、「村はづれから村はづれから迄」という課題に付けた「手垢てあかをつける奉額ほうがちようの奉賀帳」という句がある。青苧で豊かになった村を一軒残らず回って募金を集めて、俳額を奉納したのである。

2.4 天童市の俳額

天童市の俳額に関するまとまった文献はない。山形県立博物館(1985)の『山形県の絵馬—所在目録—』^{いとふんじろう}と伊藤文治郎(1990)の「俳諧余話」から<表5>を作成した。

<表 5> 天童市の俳額一覧表

所在地	区分	奉納年	名称	大きさ (cm)	備考
高野辺地蔵堂 <small>たかのべじぞうどう</small>		明治39年(1906)	俳額	46×123	
道満春日神社 <small>どうまんかすが</small>		明治8年(1875)	前句額	43×182	
道満春日神社		明治22年(1889)	前句額		
道満春日神社		明治32年(1899)	俳額	43×230	
若松観音 <small>わかまつかんのん</small>		明治34年(1901)	俳額	107×273	

68) 絹糸も青苧も売り切れてしまったという句である。特産の青苧で知られたが絹も作られるようになり、20世紀になると青苧の生産が衰退した。

おいのもりから 老野森加茂神社	明治32年(1899)	俳額 1		追善
老野森加茂神社	明治32年(1899)	俳額 2		69)
さんぼうじ 三宝寺	明治34年(1901)	俳額		追善70)
ぶっこうじ 仏向寺	明治35年(1902)	俳額		追善71)
ぬくづしょうりんじ 貫津昌林寺		俳額		

上記の俳額から老野森加茂神社の俳額2を検討する。俳句が191句、和歌が2首書かれている。文献としては伊藤文治郎(1987)の「老野森加茂神社奉納俳句扁額」がある。

判者 花の本⁷²⁾

鳳凰も出た噂あり千代の春	西京	聴秋 ^{ちゅうしゅう}
のどか ひより かも 長閑なる日和や加茂の神祭 ⁷³⁾	山形	松寿 ^{しょうじゅ}
ほしだて 橋立や霞む夕日を波の上 ⁷⁴⁾		清光 ^{せいこう}
ふでうり 筆売を縁に廻すや萩の主 ⁷⁵⁾		一花 ^{いっか}
梅白し赤し鳥居と神の幣 ⁷⁶⁾		五柳 ^{ごりゅう}
うめの香や奥の障子の明はなし ⁷⁷⁾	乱川 ^{みだりがわ}	如銭 ^{じょせん}
せみ鳴やまたもつぎたす鶴瓶繩 ⁷⁸⁾	天童	翠峰 ^{すいほう}

69) 上田聴秋の来訪を機会に、聴秋を判者として奉納した。

70) 文窓の追善で、上田聴秋が判者である。

71) 藻淵(工藤六兵衛)の追善で、三森幹雄が判者である。

72) 判者は選者である。上田聴秋は花の本11世である。

73) 加茂神社の祭は京都の葵祭で、旧暦の4月に行われた。

74) 京都府北方の天橋立で、海の中に長い砂州が伸びている。

75) 筆売なら玄関へ売りに来るが、庭の萩がみごとなので縁に廻って見て欲しいと主人が告げた。たぶん筆は売れたであろう。

76) 梅が白く鳥居が赤で又サも白という単純な発想である。

77) 梅の香が良いので奥の障子を解放した。奥の間まで香が届くは誇張である。

78) 夏には水が多く必要である。つるべ井戸の水が減ったので縄を長くしたが、さらに長くしないと水が汲めないのである。

「うめの香や」の句は和歌の発想で、そうした和歌に対して正岡子規(1955)が明治31年(1898)2月23日の新聞『日本』で痛烈な批判⁷⁹⁾をして、後にその批判は『歌よみに与ふる書』の一部となった。聴秋の句も論評のしようがない句であるが、「筆売を」や「せみ鳴や」の句は実際に即した句である。天童の翠峰はこの俳額と同じ年に、弟を追善する俳額¹を奉納した地元の宗匠である。なお、村山古郷^{むらやまこきょう}(1878)が説いたように、正岡子規は三森幹雄に会って紹介状を書いてもらい、東北地方の宗匠に会う旅行をした。子規はこの旅行によって旧派の宗匠の実態を知り、俳句の革新を始めたのである。

2.5 中山町の俳額

中山町もまとまった文献はない。山形県立博物館編(1985)の目録と中山町立歴史民俗資料館の情報提供⁸⁰⁾から、下記の〈表6〉を作成した。

〈表 6〉中山町の俳額一覧表

区分 所在地	奉納年	名称	大きさ(c m)	備考
おかせんじゆかんのんどう 岡千手観音堂	文政4年(1841)	俳額	46×123	せんとうがく 銭塔額 ⁸¹⁾
かなざわはくさん 金沢白山神社	寛政4年(1792)	俳額	47×152	
つちはしがっさん 土橋月山神社	慶応2年(1866)	俳額	55×213	
ながさきじんめい 長崎神明神社	明治45年(1912)	俳額	36×182	
長崎神明神社	嘉永7年(1845)	俳額		

79) 「今日までの代々の歌よみがよみし梅の香は、おびただしく数へられもせぬほどなるに、これも善い加減に打ちとめて、香水香料に御用る被成候は格別、その外歌には一切これを入れぬ事とし、鼻つまりの歌人と嘲らるるほどに御遠ざけ被成ては如何や。小さき事を大きくいふ嘘が和歌腐敗の一大原因と相見え申候」

80) 中山町教育課生涯学習グループによる2010年1月28日付の電子メールによる。

81) この地方には、絵馬の額を銅貨や塔の形にした銭塔額がある。多額の金銭や塔を

やなぎさわいしこ 柳沢石子神社	嘉永7年(1845)	俳額	51×182	
やなぎさわみたけ 柳沢御嶽神社	嘉永7年(1845)	俳額	51×182	
いわやじゅうはちやかんのん 岩谷十八夜観音	嘉永4年(1841)	俳額		82)

中山町の俳額では岩谷十八夜観音の俳額を渡辺信三(1977:189-191)が解読した。豪雪で放棄された山村にある小堂であるが、昔は信仰されてこの地方の俳人の俳句48句を書いて奉納された。

赤い実の野にある内に液雨 ^{えきう} けり ⁸³⁾	一勢 ^{いっせい}
寝やうとて櫓火 ^{ぼたび} いければ鴨 ^{かひ} の声 ⁸⁴⁾	其勇 ^{きゆう}
舟につむだいこん白しはつ時雨	露峰 ^{ろほう}
月細る空色寒し鴨 ^{かひ} の声	周谷 ^{しゅうこく}
傘 ^{かさ} 張りの保 ^{ほし} し那 ^{なら} らへたる小春 ^{なはる} 哉 ⁸⁵⁾	玉山 ^{ぎよざん}
海荒れて畑へ上る千鳥 ^{ちどり} かな	稲玉 ^{いなだま}
月も量 ^{かさ} めさす十夜 ^{じゅうや} を仕舞 ^{しま} ひけり ⁸⁶⁾	吟霞 ^{ぎんか}

この俳額では鴨の句が12句、液雨を含んで時雨が9句、千鳥が5句と冬の季語に集中している。最後に応鐘^{おうしゅう}とあって10月に奉納された

寺社へ寄進するのは困難なので、銭塔額とした。

82) 13日・15日などと日を決めて、月の出をまって礼拝や飲食をする月待講が各地にある。18日は観音の縁日なので、月を観音として観想する寺が十八夜観音である。十八夜観音は、山形県と宮城県に分布する。

83) 旧暦の10月に降るのが液雨で、時雨に含めることも多い。

84) 櫓は木の根や切り株を燃料にしたもので、長い間燃える。燃え残りを灰に埋めて寝ようとしたら、鴨の声が聞こえた。

85) 昔の傘は竹の骨に油を引いた紙を貼って作った。冬なのに天気が良くて暖かいので、制作中の傘を並べて乾している。

86) 旧暦の10月6日から15日まで毎日念仏を唱えるのが十夜である。満願の15日にはせっかくの月に薄い雲がかかったが、これで終わったという素朴な信仰心が感じられる。

という事情はあるが、これだけ鳥に集中するのも珍しい。中山町は内陸にあるが、最上川の支流が流れるので水鳥が集まるようである。鴨の句は鴨の声を夜に聞くといった状況で詠まれている。鴨は夜でも活動して大きな声で啼くので、知っていれば姿を見なくても鴨とわかる。自然と人の生活の近さを思わせる。「傘張りの」の句は、当時の生活を実写している。武士でさえ貧しいものは傘張りの内職をしたといわれるが、俳額中の俳句で傘張りの句は他に記憶がない。この俳額には自然や生活が素直に詠まれている。なお、俳句のデータベース『俳句情報探索』で傘張りを検索すると重五^{じゅうご}⁸⁷⁾の1句の他は正岡子規の5句だけである⁸⁸⁾ことを知ることができる。

2.6 山形県中部の俳額の総括

山形県中部の俳額を集計すると、下記の〈表7〉となる。

〈表7〉山形県中部の俳額の集計表

時代 町村市	江戸	明治	大正	昭和	平成	不明	計
河北町	2	10	1	3	1	1	18
寒河江市	13	12		3			28
大江町	18	10		4	1		33
天童市		9				1	10
中山町	7	1					8
計	40	42	1	10	2	2	97

山形県中部だけでも、97枚の俳額が残っている。最古のものは寒河江八幡宮の寛保元年(1741)の俳額である。大江町は古い俳額が多

87) 加藤重五(1654~1717)は名古屋の材木商で俳人。芭蕉が名古屋の俳人達と詠んで蕉風を確立した俳諧連句『冬の日』に加わったことで知られる。

88) <http://taka.no.coocan.jp>. (検索日:2014.3.25)「傘張の眠り胡蝶のやどり哉重五」、「夕立や傘張り傘をたゝみあへず正岡子規」など。

いが、大部分が前句額である。寒河江市も俳額が多い。慈恩寺本堂の文化11年(1828)の俳額は当時の有力な俳人を網羅していて、俳句の歴史を研究する資料となっている。寒河江市は紙の俳額が多いのも特徴である。俳額はたいてい板の額であり、軒下に掛けるために誰でも見ることができた。しかし、風雨に曝されて消耗も激しかった。これに対して紙の俳額は、室内で大切に保管される前提で作られたと考えられる。俳額が多く残っている所では、昭和や平成の俳額もある。俳額は現在の俳句雑誌の役割であったから、俳句雑誌の発行が盛んになると役割を終えたと考えられる。けれども俳額を日常的に見る機会があれば、新たな俳額を掛けて自分たちの俳句を後世に残そうとした。

次に山形県中部の俳額を類型別で分類すると、下記の〈表8〉のようになる。最も多いのが法楽で、前句額はみな法楽である。ただし実際の目的は別にあることが多い。大江町は山村であるが青苧の生産が盛んで、村人が楽しみのために前句額を法楽として奉納したのである。次に多いのが追善であるが4枚だけと、他の地域に比べて少ない。明治以後になると、目的そのものを趣旨として奉納することが多くなり、奉納の趣旨が多様となった。日清・日露の戦争に関わる俳額が3枚あり、時代を反映している。谷地八幡宮の師匠報恩俳額は、64歳の五鳳の弟子達が、師匠のために奉納した。追善俳額は死後に奉納するが、生前に奉納した珍しい俳額である。師匠の還暦や古稀を記念して論文集を発行するのと同様な趣旨であるが、俳額としては例がない。

〈表 8〉俳額の奉納の主な趣旨の類型別表

区分 俳額名	年代	奉納の趣旨	実際の目的
寒河江市寒河江八幡宮	天保15年(1844)	法楽	法楽
寒河江市地藏堂華嚴院	元治元年(1864)	法楽	法楽
河北町高林寺	慶応4年(1868)	法楽	巡礼記念
河北町溝延南泉寺	明治32年(1899)	法楽	法楽
河北町溝延八幡神社	昭和48年(1973)	法楽	天皇誕生日

大江町道海地藏尊	文久元年(1861)	法楽	村人の娯楽
大江町左沢実相院	明治24年(1891)	追善	8名の追善
寒河江市本楯満福寺	明治39年(1906)	追善	父の一周忌
寒河江市寒河江八幡宮	明治28年(1895)	戦捷記念	日清戦争
河北町高関熊野神社	明治37年(1904)	戦勝祈願	日露戦争
寒河江市高屋熊野神社	明治38年(1905)	戦捷記念	日露戦争
河北町谷地八幡宮	明治11年(1878)	師匠報恩	五鳳報恩
河北町溝延八幡神社	昭和57年(1982)	建物改修	建物改修
大江町左沢八幡神社	昭和10年(1935)	復興記念	俳額復興
河北町谷地宿用院	明治34年(1901)	鐘供養	鐘供養
大江町漆川巨海院	平成6年(1994)	芭蕉300年	芭蕉300年
寒河江市寒河江八幡宮	昭和63年(1988)	入部800年 ⁸⁹⁾	創立20年 ⁹⁰⁾
河北町溝延八幡神社	平成7年(1995)	400号記念	ひまわり
寒河江市七日町裕林寺	昭和37年(1962)	吟行記念	裕林寺吟行

大江町には謎額や前句謎額といった他にあまりない俳額が多い。本稿ではその内のほんの一部ではあるが、解釈を行なった。謎を解釈するのは、現在ではそうとうに困難になっている。

次に俳人の流派を検討する。この論文で扱う範囲は古代の村山郡で、今でも村山地方と呼ばれている。井上隆明(2003:173-176)は、「山形県が美濃派⁹¹⁾の影響下にあった」として、「村山美濃派」を設定した。「この派の小林風五⁹²⁾が安永天明期すなわち蕪村と同時代の山

89) 鎌倉幕府の重臣であった大江広元が、陸奥守を兼任して寒河江の領主となってから800年記念を趣旨とした。

90) さくらんぼ俳句会の創立20周年が実際の目的である。

91) 芭蕉の晩年の弟子であった支考を祖とする流派で、獅子門ともいう。美濃すなわち岐阜県が拠点のために、美濃派と呼ぶ。俳句を大衆化して、地方へ勢力を広げた。「田舎蕉門」とやゆされることもある。現在も獅子門として継続し、俳句の流派で最長の歴史を誇る。

92) 1744～1791。山形城下の豪商である足利屋の当主。俳句は美濃派の風堂に学

形を代表する存在である」と述べている。その風五からの分派きちじに吉事えんげっかい ちようしうえんいっせき園月海-聴松園一夕という流れがある。大江町教育委員会(1991:6)は、
 「一夕 聴松園また白無老人と号し、山形鳥海月山ちようかいがっさんりようしよくう両所宮の神主で、本名は田中実といい、文化11年(1815)生れ、明治35年(1902)に88歳で死んでいる。」と書かれている。大江町の俳額には一夕評という俳額が実に多く、〈表4〉の謎額もそうである。ただし、この額の一夕は松聴園の父親がんげつていっせきの既月亭一夕である。同じ神社の神官で、職業も俳号も世襲したのである。寒河江市慈恩寺の地藏堂華嚴院の前句額にも、周玉・一夕・如松として大江町の前句額の評者の名が見える。こうした点から、山形県中部の前句額の評者はおおよそ村山美濃派で、大江町を中心に寒河江市にも勢力を持っていたと考えられる。

美濃派以外ではかしゆう ゆうしゆう稲州と宥勝の影響が考えられる。井上隆明(2003:182)は「西村郡の西端、がっさん ゆどの さんろく にしかわまち月山、湯殿山麓に西川町がある。旧時代は砂金でにぎわった。化政・天保期93)、かいわい界隈のリ-ダ-は稲州と本道寺94)僧宥勝りんざんこと淋山だった」と説いている。稲州は代々名主を務めたくどう工藤三九郎家95)の5代目という豪農で、師は京都の花本鳳朗96)である。

び、美濃派4世いさいぼう でわあんざん以裁哉坊の出羽行脚で指導を受けた可能性も高い。

- 93) 年号の文化と文政の時代を合わせて化政期と呼ぶ。それに天保を加えて、1804年から1844年ということになる。
- 94) 月山付近を横断する六十里越街道から出羽三山へ上る南側の登山口にあった真言宗の山岳寺院で、今の西川町本道寺にあった。江戸時代には東北地方でも最大級の大伽藍を誇った修験の寺であったが、明治になって廃絶して建物すら残っていない。明治以後は口ノ宮湯殿山神社となった。宥勝は本道寺の住職として生涯を終えた。
- 95) 当主はみな工藤三九郎を名乗って名主を務めた。いまでも古宅が残り膨大な文書が残されている。西川町から『工藤三九郎家俳諧資料目録』という大部の目録が発行されている。
- 96) 田川鳳朗(1762~1845)は道彦の弟子で、天保の三宗匠と言われた。鳳朗の働きかけで、1843年に没後150年の芭蕉へ「花の下大明神」の称号が与えられた。鳳朗も花の下翁の称号を得た。

有勝は先の寒河江市の慈恩寺の文化11年の俳額を奉納した。有勝の師は江戸の巢兆で、俳額にも載っている。巢兆の師は白雄^{しろお}で、長翠、みち彦、葛三といった白雄の高弟も俳額に載っている。省略はしたが、稲州も載っている。寒河江八幡宮の天保15年(1844)俳額は稲州の選で、師の鳳朗の句が最初に書かれている。そのように山形県中部には有勝が奉納の俳額1枚と稲州選の俳額1枚があって、この2名さらには巢兆や鳳朗の影響があることは間違いないが、各1枚だけであるからこの2名の影響が大きいとまでは言えない。

明治時代の俳額に当時の大宗匠が選者となった俳額を多数見出したので下記の〈表9〉を作成した。京都の上田聴秋と東京の三森幹雄は東西の巨頭として今日まで名を残したが、浜松の松島十湖^{おがたつとむ}はあまり知られていない。十湖は尾形仿編の俳文学大辞典(1995)に記載され、地元の浜松で郷土の偉人として知られている程度である。村山古郷(1978)が作成した1870年頃の俳人の表には東京に幹雄、遠江に十湖の名があるが、聴秋の名は載っていない。十湖は若い時から知られた宗匠であった。こうした大宗匠の事績を正當に評価すべきで、これらの俳額は彼等の活動を今に伝える貴重な資料であると考えられる。

〈表 9〉 明治の三大宗匠の俳額

俳額	宗匠		
	上田聴秋	三森幹雄	松島十湖
河北町 荒町中不動尊 明治43年(1910)俳額			○
河北町 下榎白山神社 明治35年(1902)俳額			○
河北町 高関熊野神社 明治37年(1904)俳額	○		○
寒河江市 慈恩寺本堂 明治16年(1883)俳額		○	
寒河江市 皿沼白山神社 明治42年(1909)俳額			○
天童市 老野森加茂神社 明治32年(1899)俳額	○		
天童市 三宝寺 明治34年(1901)俳額	○		
天童市 仏向寺 明治35年(1902)俳額		○	

3. 結論

以上のように山形県中部には97枚の俳額が残っている。その中でも大江町は33枚、寒河江市は28枚で、相当に多い数である。最古のものは寒河江八幡宮の寛保元年(1741)の俳額である。昭和や平成の俳額もあるので、俳額を奉納する習慣が近年まで残っていた。大江町は33枚の中で25枚が前句額であるのに対して、河北町では18枚中に前句額は1枚もない。大江町には前句やそれから派生した雑俳、その中でも数少ない謎の額まである。「名古屋地方とならび、地方雑俳の一中心とされる特異性が光る」という先学の指摘は謎額や前句謎額がある。大江町には該当するが、山形県中部の全体がそうであるとは、俳額の分析からは言えない。しかし山形県中部の大江町に限れば、謎などの雑俳が盛んであったという特異性がある。他に寒河江市にも前句額があり、大江町と同じ評者という場合もある。そうして、前句額の評者は、主として美濃派であると考えられる。

俳額の奉納の趣旨は江戸と明治の初めは、大半が法楽である。ただし、大江町の前句額は村人の楽しみという実際の目的があり、法楽という名分を借りただけである。神仏に対して畏敬の念を持っていたから、勝手な目的で奉納することは許されないと考えた。西国三十三か所の霊場を団体で巡礼した記念の俳額を、東北の地で見出すことができた。しかし、その後は法楽ではなくて、何らかの明確な目的を持ち、その目的を趣旨として奉納されるようになった。建物再建や俳額復興といったいかにも俳額らしい目的もあれば、俳句結社や俳句雑誌の記念という目的もある。追善が少ないのは、この地方の特徴である。河北町の谷地八幡宮の師匠報恩俳額は、追善ではなく生前に師匠の為に奉納した珍しい俳額である。

寒河江市の慈恩寺本堂の文化11年(1828)の俳額は、当時の有力な俳人を網羅したものである。三大家の月居・士郎・道彦、天保の三宗匠の蒼虬、江戸四大家の成美・巢兆、奥羽四天王の乙二・五明・長翠という豪華な顔ぶれが揃っていて、このような俳額はあまりない。

明治になってからでは、上田聴秋・三森幹雄・松島十湖がこの地方

の俳額の選者を務めた。松島十湖選の4枚の俳額の存在は、この研究によって発見した成果の一つであると考えられる。

参考文献

- 阿部西喜夫(1985)『宥勝奉納慈恩寺の俳額について』『西村山地域史の研究』第3号、西村山地域史研究会発行、pp.65-76.
- 飯田竜太(1981)『俳句の地方性と土着性と-思いつくまに-』『国文学解釈と教材の研究』第26巻第3号、ぎょうせい、pp.36-41.
- 伊藤文治郎(1987)『老野森加茂神社奉納俳句扁額』『郷土てんどう』第15号、天童郷土研究会発行、pp.14-19.
- _____ (1990)『俳諧余話』『郷土てんどう』第18号、天童郷土研究会発行、pp.17-20.
- 井上降明(2003)『東北・北海道俳諧史の研究』 新典社、pp.158、pp.173-176、pp.182-188.
- 大江町教育委員会(1991)『大江町の絵馬4.俳額1』大江町教育委員会発行、pp.1-31.
- _____ (1992)『大江町の絵馬5.俳額2』大江町教育委員会発行、pp.1-30.
- _____ (1993)『大江町の絵馬6.俳額3』大江町教育委員会発行、pp.1-28.
- _____ (1994)『大江町の絵馬7.俳額4』大江町教育委員会発行、pp.1-26.
- 尾形叡編(1995)『十湖』『俳文学大辞典』角川書店、p.369.
- 河北郷土史研究会(2009)『河北町の絵馬』河北郷土史研究会発行、pp.28-102.
- 五来重(1976)『仏教と民俗』角川書店、p.207.
- 寒河江市教育委員会(1993)『寒河江市史編纂叢書第47集 寒河江市の奉納俳額と俳書』寒河江市教育委員会発行、pp.1-182.
- 本郷民男・権海珠(2013a)『青森県の俳額に関する一考察』『日語日文学』第60輯、大韓日語日文学会、pp.249-267.
- _____ (2013b)『秋田県の俳額に対する小考』『日本語教育』第66輯、韓国日本語教育学会、pp.263-281.
- _____ (2014)『山形県北部の俳額に関する一考察』『東北亜文化研究』第38輯、東北亜細亜文化学会、pp.389-405.
- 正岡子規(1955)『五たび歌よみに与ふる書』『歌よみに与ふる書』岩波書店、pp.20-23.
- 村山古郷(1978)『明治俳壇史』角川書店、pp.18-21、pp.105-110.
- 山形県立博物館(1985)『山形県の絵馬-所在目録-』山形県立博物館発行、pp.40-57、pp.65-68.
- 矢羽勝幸(1994)『信濃の一茶』中央公論社、pp.197-205.
- 渡辺信三(1977)『山形俳諧風土記』高陽堂書店、pp.179-183、p.189、p.191、pp.209-215.

<http://taka.no.coocan.jp>。(検索日:2014.3.25)

성 명(한 글) : 홍고타미오

(한 자) : 本郷民男

(영 문) : Hongoh, Tamio

논문영어제목 : A Study on Haigakus of Midland Yamagata Prefecture

소 속 : 한국하이쿠연구원 연구위원

E-mail : keisyunanzan@yahoo.co.jp

성 명(한 글) : 권 해 주

(한 자) : 權 海 珠

(영 문) : Gwon, Hae-Ju

논문영어제목 : A Study on Haigakus of Midland Yamagata Prefecture

소 속 : 경상대학교 일어교육과 교수

E-mail : hjguen@gnu.ac.kr

투 고 일 : 2014년 3월 31일

심사개시일 : 2014년 4월 3일

심사완료일 : 2014년 4월 29일